

ソデイカ情報

沖縄県水産試験場

901-03 沖縄県糸満市西崎1-3-1

第2号 1997年7月 電話 098-994-3593・3597

ファクシ 098-995-2357

1995年11月から1996年6月に、糸満漁協に水揚げされた3,494のソデイカの外套長を測定した結果が図-1です。夏から秋にかけて急激に成長している様子がわかります。(8月は海洋水産資源開発センターの調査。)

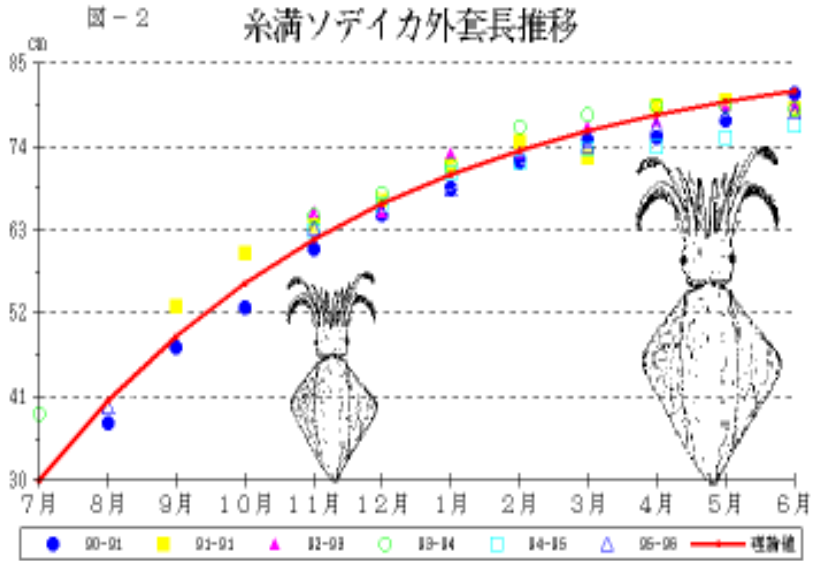
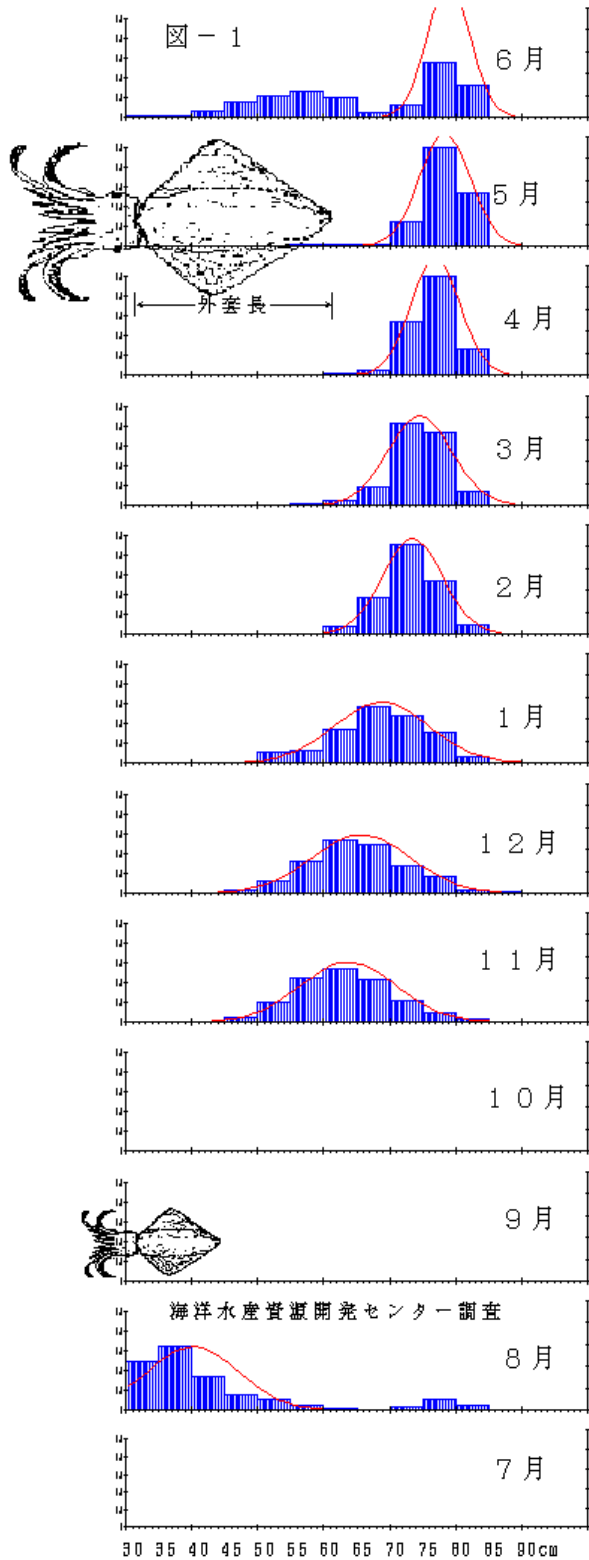


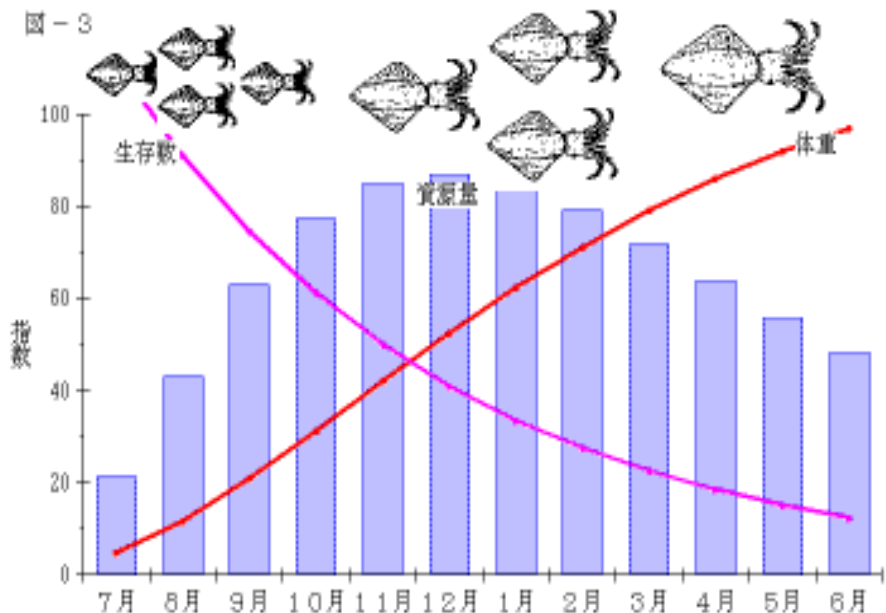
図-2は過去6年間に測定された平均外套長と、これから求められる成長曲線です。サンプル数の少ないものや、小型なイカが市場に出されていないと思われるデータは除きました。

4月以降は、産卵後死亡するイカが増えるため、平均外套長は小さめになります。

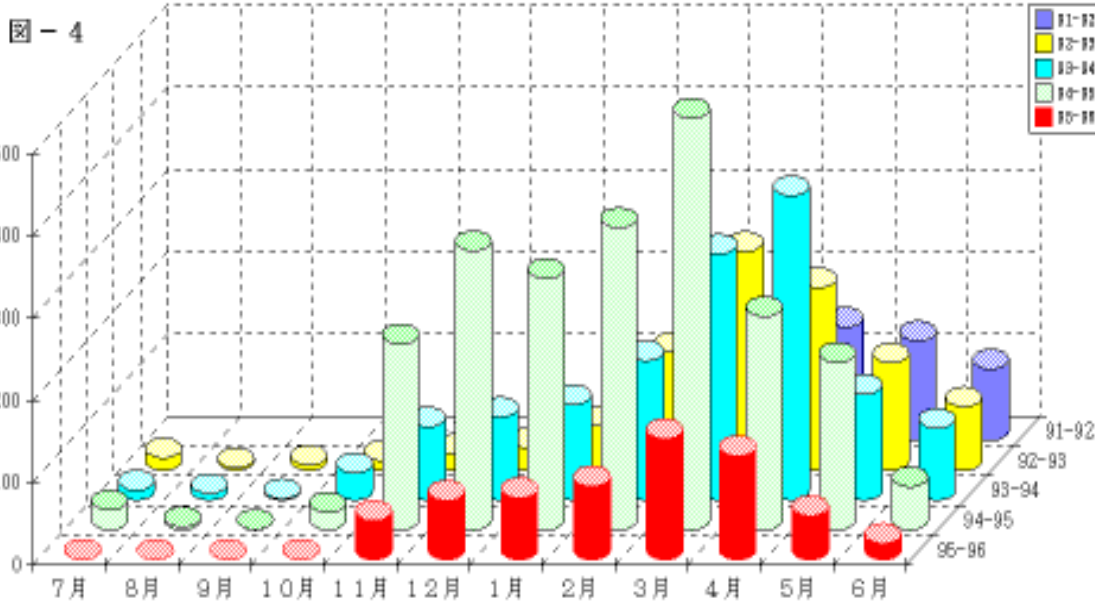
図-3は、理論的な成長と生残率から、資源量がどう変化するかを示す1つの例です。

成長が速いので、夏場を禁漁にして我慢すれば、資源量が大きく育つことになります。7月-10月の禁漁の第1の目的は、このように小型のイカを漁獲しないで大きくなるまで育てることにあります。(但し、結果として産卵するイカが増える効果もあります。)

図-4、図-5は、過去5期の全県の水揚げ量の推移です。今期(1995年11月-1996年6月)は、631tで、前期(2,343t)の約1/4でした。



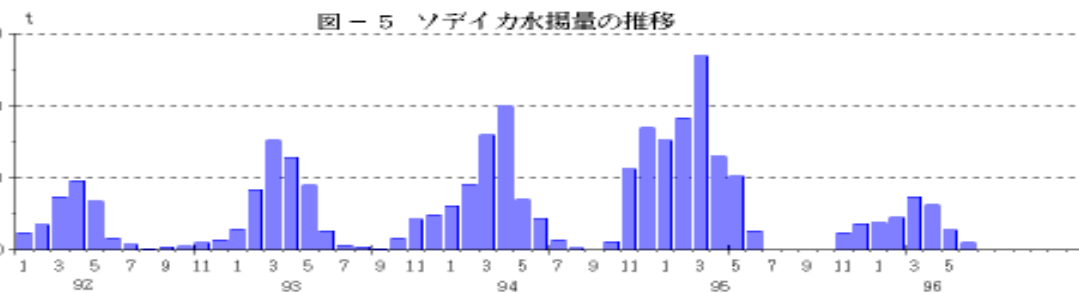
今期はなぜ不漁だったのでしょうか？原因としては、海洋環境の変化と獲り過ぎの両方が考えられます。ソデイカの卵塊は海面付近を漂っているため、幼稚イカの分布は流れの影響を強く受けるだろうと予想されます。また、1995年の秋は、日本海で例年になくソデイカが好漁で沖縄のソデイカの価格が心配されたほどでした。これもソデイカ漁が環境の影響を受けやすいことを示しています。



しかし、ロシアの研究者の報告では、ソデイカは見かけによらずあまり活発に泳がず、そのため急激に成長できるとしています。少なくとも、カツオやマグロのように大きな回遊は行わないと思われます。

また、図-6は、あるソデイカ延縄漁業者の漁獲位置です。円の大きさが漁獲量を示しています。これを見ると、1992年から年を追う毎に漁場が沖合化していき、様子がわかります。

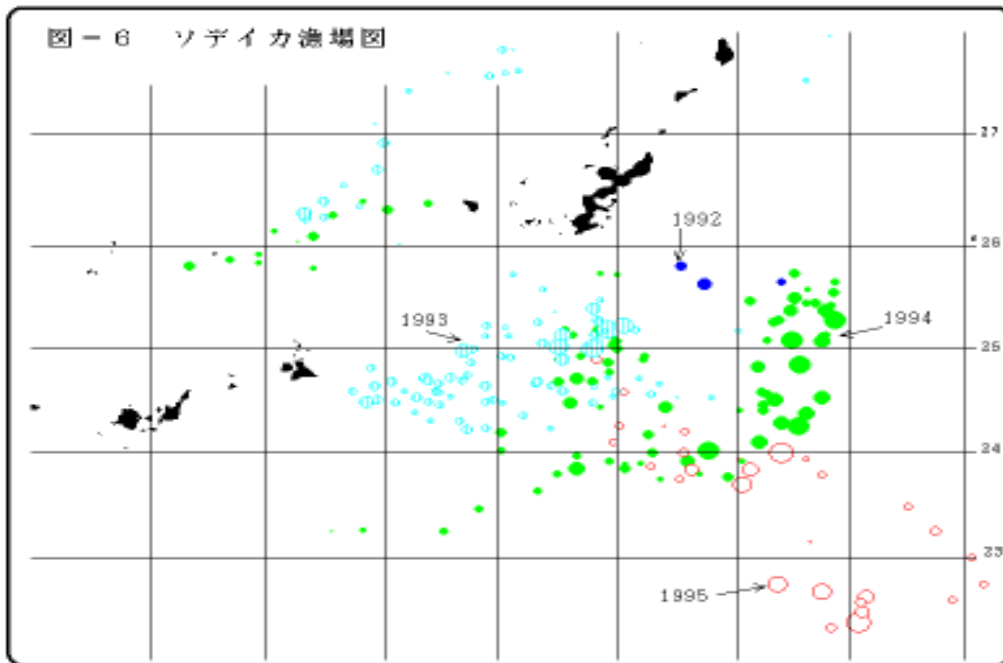
旗流しの漁業者も、年々漁場が遠くなってきていると言っています。



ソデイカは回遊を行うのか？

流れによって運ばれてくる卵稚子の量はどれくらいなの、イカのどのくらいの割合を釣っているのか？どの程度までなら釣っても資源は減らないのか？どの程度までなら釣っても資源は減らないのか？等が今後資源管理を行う上で大切な情報となります。

いずれにしても、何らかの資源管理は今後も続ける必要があると思われます。



今後も大切なソデイカ資源を守り、持続的に利用していくためには、資源の状態を調査する必要があります。このため、水産試験場及び漁政課が行う漁獲量、漁獲努力量（出漁日数、漁具数等）、漁場の調査にご協力願います。また、海洋水産資源開発センターが実施する標識放流調査にもご協力願います。